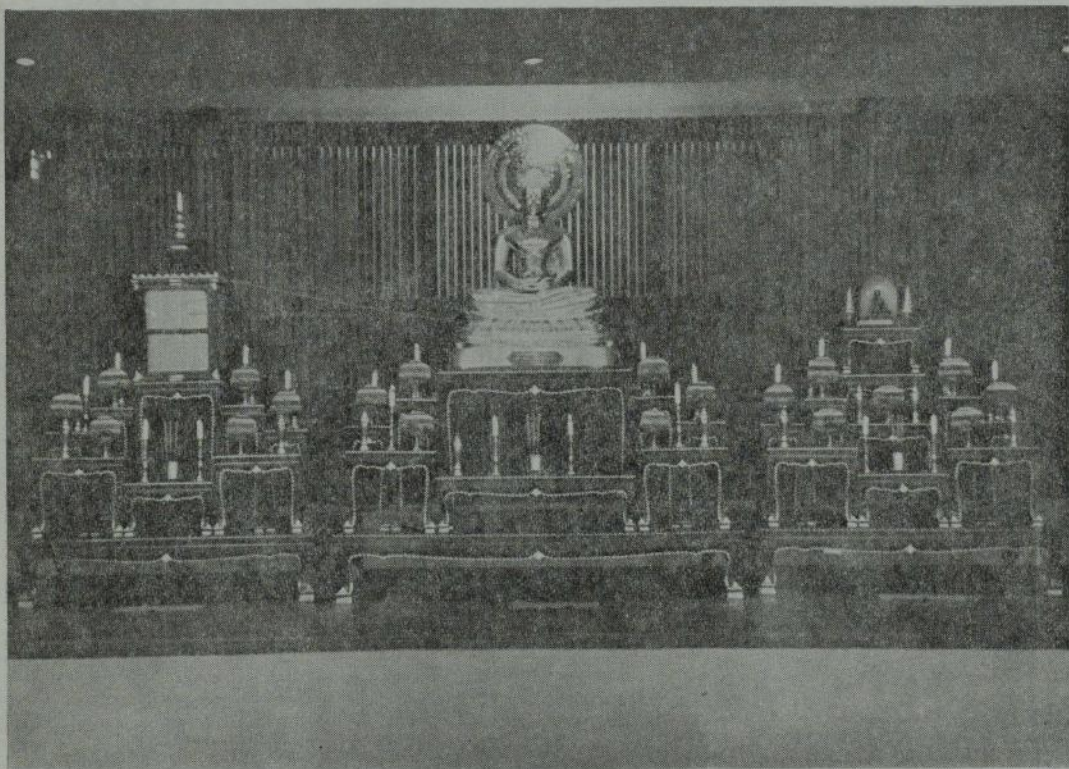


NO. 191

全 仏

10 / 48



バンコクのWFB本部の仏壇

財団法人 全日本仏教会

法人税法改正で陳情

自民党税調会に

財団法人日本宗教連盟理事長名をもつて去る七月左記の要望書を大蔵大臣宛に提出した。

法人税法施行令第五号第五号改正に関する要望書

施行令第五号第五号に列挙された除外例（イロハニホ各項）以外の不動産貸付業は、すべて収益事業となり、したがって宗教法人が基本財産の運用として、宗教法人法第六条第二項に基づき営む宅地貸付業も除外例（ニホ両項）を除きすべて課税対象になりました。

法人税法第七条は収益事業以外の所得について法人税の非課税を規定しています。昭和四十六年度の改正に当り、大蔵省は不動産貸付業については目にあまる、社会的非難のつよい収益事業について新たに列挙、課税範囲に入れることを検討する旨言明しておられますが、前記宅地（住宅用地）貸付業は適法の事業でありまた社会的非難も皆無であります。原則として非課税の公益法人等の所得について特に政令で列挙して収益事業とするのですから当然何らかの基準があるものと考えられます。従来大蔵省の挙げ

られている基準（民間の営利会社の行っている収益事業と同等または著しく類似するもので、それらと競合し、圧迫若しくは圧迫の恐れあるもののみを止むを得ず列挙して課税対象とする）に照合しても、前記宅地（住宅用地）貸付業は全く該当しないことは明白であります。

以上の理由により施行令第五号第五号（イ）を左記のように改正され、宗教法人が基本財産の運用として宗教法人法第六条第二項に拠って営む宅地（住宅用地）貸付業を除外例に含めていただくよう要望致します。

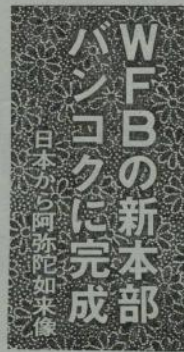
記

宗教法人法（昭和二十六年法律第二百一十六号）第四条第二項（宗教法人の定義）に規定する宗教法人又は民法第三十三条の規定により設立された法人が行う

宅地（住宅用地）の貸付業及び墳墓地の貸付業。

これより先、去年十月七日付文部大臣宛提出した墳墓地貸付業に関する質問状（全仏十一月号第百八十二号掲載）

に対する回答もないため、全日本仏教会では独自の立場から自民党関係者と折衝を重ね、参議院議員西村尚治氏の紹介を得て、去る九月十二日、自民党税制調査会において要望書の内容等陳情説明を



WFBBの新本部
バンコクに完成
日本から阿彌陀如来像

タイ国バンコク市に、かねて建設中であった世界仏教徒連盟（WFBB）の新本部がこのほど完成し、さる八月十八日、落慶式が行われた。

落慶式は、午前午後にわたって新本部の講堂で行われ、タイ国僧伽最高位の法師アリヤフォンサガタヤン大僧正以下二十三か国の僧伽、WFBB会長ブリン妃殿下をはじめ各国WFBB代表、それに各国大使が列席して、厳肅なる説経、タイ国皇帝の式辞（代読）等で盛大であった。日本支部の全仏からは、理事中山理々師

が出席した。WFBBは戦後間もない昭和二十五年、セイロン国の山間都市であるカンディ市にある仏蘭寺で発会したものであり、過般逝去されたマララセーケラ博士が特にその発足に努力されたものである。

当初定められた憲章によれば、同本部は二か年毎に加盟国もちまわりになっていったが、八年間はコロンボ市にあった。その後、昭和三十四年にバンコク市で開かれた仏教徒会議の決議によって、一時ビルマの首都ラングン市に移された。昭和三十八年に同国の政変によってタイ国バンコク市にあるタイ国仏教会の建物に移されている。翌年のインドでの仏教徒会議では昭和四十三年までバンコク市に置くことになっていた。その後、四十一年のチエンマイ大会、四十四年のマレーシア大会で、同本部は恒久的にタイ国におかれることが決議された。



贈った阿彌陀如来像（高さ四十センチ）

第21回全日本仏教徒会議
池上本門寺大会決算書

一金	8,900,000円	収 入	予 算	高
一金	8,623,720円	入 入	算 算	高
一金	8,900,000円	支 出	算 算	高
一金	8,623,720円	支 出	算 算	高
一金	0円	収 入	支 出	差 引
		収 入	支 出	差 引

項 目	予算額	決算額	対 予 算 額	
			収 入 超過額	収 入 未 済 額
1. 全仏拠出金	2,000,000	2,000,000	0	0
2. 全仏関係金 特別協賛	1,100,000	1,100,000	0	0
3. 池上本門寺 分担金	2,000,000	2,000,000	0	0
4. 東仏関係院 負担金	1,000,000	1,000,000	0	0
5. 東仏関係金 特別協賛	1,700,000	1,328,720		371,280
6. 大会参加費	1,050,000	1,089,000	39,000	
7. 雑 収 入	50,000	106,000	56,000	
収 入 合 計	8,900,000	8,623,720		276,280

支 出 の 部

項 目	予算額	支出済額	○増 △減 流 用 額	予 算 不 用 額	付 記
1. 会 議 費	800,000	669,422	△ 30,000	100,578	6項へ流用
2. 事 務 費	500,000	564,808	○ 64,808	0	14項より流用
3. 通 信 費	200,000	171,325	0	28,675	
4. 印 刷 費	300,000	201,750	△ 90,000	8,250	12項へ流用
5. 式 典 費	500,000	508,175	○ 8,175	0	8項より流用
6. 講 師 謝 礼	150,000	180,000	○ 30,000	0	1項より流用
7. 記 念 品 代	1,300,000	1,709,000	○ 409,000	0	18項より流用
8. 賞 状 代	500,000	421,050	△ 8,175	70,775	5項へ流用
9. 日本寺寄付金	300,000	300,000	0	0	
10. 難民救済金	300,000	300,000	0	0	
11. 記念誌作成費	1,000,000	1,012,378	○ 12,378	0	18項より流用
13. 紀要作成費	500,000	706,337	○ 206,337	0	18項より116,337 4項より9万流用
13. 中食弁当代	400,000	429,000	○ 29,000	0	18項より流用
14. 接 待 費	300,000	220,360	△ 64,808	14,832	2項へ流用
15. レセプション代	500,000	499,500		500	
16. 宣 伝 費	200,000	360,000	○ 160,000	0	18項より流用
17. 雑 費	350,000	370,615	○ 20,615	0	18項より流用
18. 予 備 費	800,000		△ 747,330	52,670	7,11,12,13,16, 17各項へ流用
合 計	8,900,000	8,623,720		276,280	

仏教国であるタイ国政府は、バンコク市内でも特に高級住宅地域に隣接し、広い道路に面する現在地を同連盟に与え、三百七十五千バートの予算で、昨秋より建築に取りかかっていたものである。落成した本部は、モダンな鉄筋二階建て、玄関を入ると広いロビーがあり、壁面には加盟WFB支部名が掲げられ、落ついたムードである。

右側に本部事務所があり、十名程の職員が執務している。一階の奥には食堂兼会議室があり、その上二階が、金銅仏をステージに安置した椅子席(約二百余)の斬新なデザインの講堂になっている。日本から贈られた阿弥陀如来像はここに安置される。

池上本門寺大会決算 承認される

去る九月十四日午後四時より、全仏事務局において監査会が開かれた。監査は全仏、東仏、池上三者よりそれぞれ選ばれている久保基太清、北川有光、石川存静三氏が出席、全仏事務局より麻布照海、桜井大乗、新聞信雄、東仏事務局長郡司博道、池上本門寺会計執事豊田弁寧各氏が立合いのもと、岩脇組織部長より収入支出決算説明がなされた。本大会の当初予算は七百五万円であったが、第二、第三次補正予算を組み八百九十万円の

予算をもって執行された。はじめ予定していなかった難民救済金、日本寺完成祝金も大会の名において支出でき、目下編集中の大会記録「紀要作成費」については収支残金を繰入れ、内容、部数等十分に

考慮して作るよう申合せ、仮払い支出として別記のとおり決算の承認を得た。本大会の事務囑託を依頼し、会計担当をお願いしていた故福井清俊氏が大会寸前に急逝されたことは誠に遺憾でありここに心から哀悼の意を表すると共に、故人にも決算の報告をして冥福を祈りた

「生命科学」と仏教」シンポジウムを終わって

(1)



真 溪 氏

われわれにとって一番大切なものといえ、取りも直さず生命(いのち)であ

る。われわれの存在そのものが生命と不離の関係にあるからである。ところがこの大切な生命についてわれわれは一体どれだけのことを知っているだろうか。古代ギリシャの博物学者や、哲学者は当時の知識を総合してこの問題を真剣に考え抜いたし、多くの宗教も、それぞれの立場から解答を与えようと努力してきた。現代の分子生物学者たちも、所謂システム工学の方式で関係のあるあらゆる学問と協力して、実験的知見を基礎として生命の本質を究明しようとしている。しかし未だ明確で、統一的な解答を得てはいない。生命とは正に定義することのむずかしい不思議なものである。つまり生命についての抽象母体が異れば、当然それから引き出される概念も異なるからである。

真 溪 義 貫

科学が研究対象としているのは実は生物であって、この場合、屢々生命は生物の属性なのである。また、宗教や哲学が取り組む場合の生命は、生命論であって生命現象についての説明とは言えない場合が多い。したがって今日、なお、生命については研究はされているが、定義はされてはいないのが現状である。いや、生命を研究すればするほど、その本質が益々判らなくなるとも言えるのではないだろうか。十五年ほど前に、モスクワで生命に関する会議が開かれた際、ノーベル化学賞受賞者、米国のポーリング博士が、生命を定義することよりも、生命を研究することの方がやさしいと言ったのは、まさに味の言葉である。しかし、少なくとも生命は、神のつくりなせる業といったような古来の神祕論は順次崩れ去って、生命を説明する種々の実験や、信頼できる素材が漸く整いはじめた現代において、それは冒険であっても、諸々の事業や理論を綜合する仕事に思い切って手を着けることが必要ではないのかと考えるようになるのである。生命

に関する科学的研究の分野では、既にこのことがはじめられている。しかし、生命と取り組んできた宗教や哲学と、この科学的研究との相互研究は、まだ試みられていない。しかも生命の科学的研究を目的とするライフ・サイエンスという学問も僅かに専門家の間で知られているにすぎない昭和四十五年に、全日本仏教会と国際仏教交流センターが共催して「生命科学」と仏教」のシンポジウムを開催する企画を樹てたのである。

分子生物学を中心とする生命科学がようやく他の科学部門との接触をはじめたばかりの時代に、仏教がこの生命科学と対面しようと言うのだから、果して接点が見出せるのかという疑問を持つ人の多かったことは無理もないことだった。しかし、それにも拘らず、われわれが敢てこの企画の実施に踏み切ったのは、生命の起源や生命現象のメカニズムが順次解明され、生命の合成さえも可能であると考えられてきた現代において、生命は「神の作り出される業」という概念は別としても、仏教はこれら科学のメスによって明かにされる事実を学習することによって、仏教の生命観に新たな展開を図ることが必要であり、一方、生命科学の中途半端な研究を利用することによって生命の尊厳を買すことがあってはならないために、仏教が何等かの寄与をすべきであると考えたからである。生命科学にも哲学的基礎が確立されねばならない。言うならば、メタバイオロジーの開発と

いうことである。

第一回のシンポジウムでは、生命科学の第一人者、江上不二夫博士から生命科学のABCを学習し、仏教学界から西義雄博士の仏教の生命観を聴き、また、千谷七郎博士から人間が他の生物と区別される一つの相違点である意識の問題からこのシンポジウムの第二段階へ移る序論を担当して貰った。

第二回のシンポジウムでは、人間の精神活動について、生物学者としての見解を若林勲博士から、また、仏教学の立場から玉城康四郎博士から見解を聴き、ある生物種について得られた生命科学の研究結果が人間への適用の可能性と限界、人間を他の動物から著しく区別している精神活動について、仏教側からかなり多くの問題を提起した。

第三回のシンポジウムでは、生物の化学的一様性から言って人間もまた、生物の一般的法則に支配されるものではあるが、一般生物の進化と人間のそれとの間には大きな相違があり、人間には生物学的進化の他に身体外に打ち建てた第二の情報系、即ち文化による進化があるが、この人間が作り出した第二の遺伝情報果して人間の未来に栄光をもたらすものであるかどうか。この解決のために今一度、生物としての人間という原点に返って検討する必要があるとの考えから、野田彦彦博士を頼りながら「生物としての人間の本性」を、また、宮本正尊博士から仏教は人間の本性をどう観のかを論じ

て貰った。

もちろん、この三回にわたるシンポジウムで、生命とは何かの全貌が明かになったわけではない。ただ、自然科学者間だけの研究には見られない人間性を中心としたソフトサイエンス的なムードの中で、生命に関する多くの問題が提起されたことだけは確かである。

生命は決して神のつくりなせる業ではないことは明かであるが、一方、無生物から生物ができることも絶対にはあり得ないことは実験的にも明かである。即ち一八二二―一八九五年の間に行ったルイ・パストゥールの実験によって、細菌と雖もその生命は決して自然に発生しないことが確認されたことは有名である。しかし二十世紀になって電子顕微鏡が発明され、ウイルスという細菌以下の生命形態が知られるに至り、その化学的な本性が単一分子を主成分とするものであるということがわかると、その物質は人工的に合成できるかも知れないという考えが起ってくる。しかも、この種の研究は急速に進み、後に述べるように生命の合成すら可能であるという見通しすらついてきた今日である。したがって同じ生命といってもウイルスから引き出された生命概念、人間を母体とする生命観との間には当然差異が出てくるし、また、一つの生物個体のなかにでも、色々の生命がある

今日、なお生き続けていることは有名な

事実である。したがって、われわれが今まで考えて来た生命概念も今後大きく変らざるを得ない。人間を母体とする生命概念、ウイルスから引き出した生命概念そして個体の諸々の生命、これらを共通根とする新しい生命観の確立こそ宗教にとっても、自然科学側にとっても重要な事項とならざるを得ない。

われわれは、この三回のシンポジウムにおいて、普通一般にいう生命とは、個体の生命のことであり、生物学的には個体―器官―組織―細胞など、生物体の構成のそれぞれの段階において生命というものが考えられることを学習した。

天台宗、ハワイに別院

来月25日入仏法要



海外布教伝道において他宗派に立ち遅れていた天台宗は、このほどハワイに進出「天台宗ハワイ別院」の開教式・

入仏法要が来る十一月二十五日に、天台座主親修のもと盛大に挙行される。

そして、細胞というものが、生物体の構造上の単位であるという所謂細胞学説は、生物のすべてに適用されることが明かになり、生命を考える場合、細胞という単位を基礎として出発することが、一番生命研究の上で好都合である。つまり生命の特質は、細胞レベルで見ることによって成立するという現代の研究態度は確かに当を得ていることを知った。しかし、生命のひとつづきの長さということになると全く問題は別である。たとえば、人間の場合、体内での消耗品としての細胞もあり、もはや補充のつかない脳や脊髄の神経細胞のようなものもある。

こうして見ると、われわれの個体の生命は、われわれを形成している部分の生命の総和ではない。したがって生命の神秘という言葉は使いたくないにしても、生命の本質には、宇宙現象自体の本質、物質―宇宙―生命―意識などを貫いて流れる現象展開の法則のようなものがあるのではないかと考えたくなるのである。この問題をこそ、科学的にも仏教哲學的にも解明することが、このシンポジウムの目的であったように思われる。以下、稿を追って学習し得た、そして提起された問題についてのべて行きたい。

(全仏文化専門委員)

天台宗では、戦前ハワイに布教所を設け、開教に努力していた経緯もあるが、昨年、ハワイ在住の篤志家のあいだから別院設立の企画がもちあがり、宗門も調査団を派遣し、着々準備をすすめてきたが、宗議会における海外伝道規約の承認も得て、用地・建物の取得になって、いよいよ開教式を厳修する運びに至ったものである。(写真はその別院)

初代開教師には、荒寛了師(仙台市・大福寺)が任命され、すでに九月七日に赴任した。

別院の所在は、ホノルル市ヌアヌ街ジャクレーンで、ワイキキから車で約十五分、閑静なところにある。

このハワイ別院開教を機に、さる九月六日、天台宗海外伝道事業団の設立総会が開かれ、団則、役員等を決めて正式に発足した。理事長には今春聴師が就任し、総裁に菅原栄海座主を推戴した。

境内は約千五百坪、建物はアメリカの名門旧キヤッスル家住居で約八十坪、その書斎を本堂にあて、そのまま別院として使用できる機能もっている。本尊は日光輪王寺から薬師如来像が、また仏具一式は延暦寺からそれぞれ贈られる。

十一月二十三日(二十八日の四泊六日)で、費用は十三万九千円。定員百名。申込締切十月十日。問合わせ窓口は、同事業団(東京都港区新橋三三一九阪急交通社ビル)電話〇三(五〇三)七三〇八。

豊山声明が欧米公演

一行十八名、四十日間

真言宗豊山派の「声明欧米公演団」が、さる九月十五日、羽田をあとに、欧米各地で四十日間の公演の旅に発った。

これは国立劇場と財団法人国際文化交流基金（今日出海理事長）が「日本の伝統音楽と前箱音楽一九七三」と称する日本の音楽の海外紹介を企画、その伝統音楽グループの受持ちに豊山派が招かれたもので、宗派としても全面的に応援、築山総長を団長として公演団を結成した。

公演団一行は、同派声明の大家・青木融光師をはじめ、声明の学術的な紹介を行うため同行する勝又俊教大正大学教授を含め総勢十八名で、かつて国立劇場のこけら落としに好評を博した「大般若転読会」をさらに研鑽を重ね、テヘランでの芸術祭参加公演を皮切りに、ベルリン、ローマ、パリ、ニューヨーク、オタワ等欧米各地を公演して、十月二十九日帰国する予定である。

事務総局録事（九月）

- 四日 大会紀要打合
- 六日 日宗連理事会出席
- 十日 駐ネパール小林大使送別会出席
- 十一日 ネパール外務政務次官歓迎会
- 十二日 自民党税制調査会出席
- 十四日 局内会議
- 〃 全仏大会決算監査会
- 十五日 本願寺伊藤哲雄輪香（全仏常務理事）本葬参列
- 十七日 和宗、妙心寺、醍醐寺を訪問
- 十九日 浅草寺、中村元氏を訪問
- 二十日～二十六日 秋期彼岸
- 二十六日 前進座河原崎長十郎氏来局
- 〃 セイロン・バンダラナイケ首相夫人追悼式に出席

昭和四十九年版

仏教徒手帳

申込み受付中

全仏総務局では、毎年御好評をいただいております仏教徒必携「全仏手帳」を左記要領にて発行致します。部数に限りがございますので、御注文はお早めお願い致します。

内容 三帰依文、四弘誓願、宗門聖日、宗派・都道府県・仏・団体役員住所録、忌日早見表、各県宗教法人事務主管部局一覽その他

定価 二五〇円（送料実費）

出来日 十一月初旬

申込先 東京都台東区西浅草一

五十五（千一）

全日本仏教会総務局

昭和49年度インド 仏跡カレンダー

- 美しいカラー印刷による四大仏跡、王舎城、祇園精舎等
- 六曜付
- 一部 1,000円（送料込み）
- 申込方法：11月15日までお葉書にてお申込み下さい。
- 申込先：株式会社千代田トラベル事業部

インド日本寺落慶法要団の申込み

本年12月1日から15日まで、インドのブダガヤで行われるインド日本寺落成慶讃法要仏跡参拝団15団体は、3日出発12月16日帰国の法要団を除いて、全部満員となりました。

12月3日出発の法要団参加ご希望の方は、至急千代田トラベルまでお申込み下さい。

参加費用 320,000円

国際旅行業協会会員
運輸大臣登録一般第154号

株式会社 千代田トラベル

東京都港区南青山5丁目6番20号（千成ビル）
電話407-3612（代）・400-5100 郵便番号107

昭和四十八年十月一日発行
十月号 第一九一号

発行人 柳 布照海
編集人 了堅
発行所 財団法人 全日本仏教会

東京都台東区西浅草一ノ五ノ五（東京本願寺内）
電話 〇三（八四三）六三、四一、三